読売新聞・4月3日朝刊の「病院の実力」に総合新川橋病院の眼科が紹介されました

読売新聞記事「病院の実力（眼科）」に当院副院長　薄井紀夫医師の記事が掲載され、「白内障」・「緑内障」について解説しています。また、眼科治療実績（読売新聞調べ）に当院が掲載され、「白内障の水晶体再建術の件数」が県内１位となりました。

（第3種郵便物認可）　2016年（平成28年）4月3日（日曜日）　読売

病院の実力 ～神奈川編 98

眼科

白内障手術 日帰りでも

今回は眼科の治療を特集する。

一覧表には、「硝子体手術」「白内障の水晶体再建術」「緑内障の手術」「網膜剥離への強膜内陥手術」の2015年の各実施件数とされ、設備やスタッフの技量が重要になる。

「小児分野の専門外来設置の有無」を掲載した。

硝子体手術は、糖尿病が進行し、目の奥の網膜周辺で血管が破れ出血した場合などに行う。眼球に3か所の穴を開け、器具を入れて血を取り除く。難しい治療

白内障は、目の中でレンズの役割を果たす水晶体が、老化などに伴い濁ってくる。水晶体を取り除き、人工の眼内レンズに置き換える手術が必要で、日帰りでも広く行われている。

眼球は内側から外側に圧力（眼圧）がかかっているが、この眼圧が高まり視神経が傷ついて、視野が徐々に狭まるのが緑内障だ。早期には眼圧を下げる点眼薬が中心だが、効果が十分でない場合、眼圧上昇の進行を止める手術が行われる。

網膜剥離は、目の奥にある網膜がはがれ失明に至る。眼球の外側を覆う強膜の上からシリコーンスポンジを押しつけ、網膜をくっつける手術が行われる。

小児分野の専門外来では、眼鏡をかけても視力が改善しない弱視や、黒目の位置がずれている斜視などを診ている。

病院の実力「眼科」
医療機関別2015年治療実績
（読売新聞調べ）

医療機関名	硝子体手術の件数	白内障の水晶体再建術の件数	緑内障の手術件数	網膜剥離への強膜内陥手術の件数	小児分野の専門外来設置（○設置は○）
総合新川橋	656	4451	51	73	○
聖マリアンナ医大	450	1233	175	36	○
北里大	418	3197	302	59	○
横浜市大病院	390	610	100	30	○
けいゆう	378	1315	27	33	
東海大	368	1173	73	36	○
昭和大横浜市北部	264	1214	27	39	
昭和大藤が丘	164	2062	16	26	
地・横浜保土ケ谷中央	162	644	78	2	
厚木市立	152	761	8	9	
国・相模原	132	1338	0	3	
横浜労災	125	848	4	4	○
横須賀共済	120	771	2	5	
横浜南共済	112	880	10	2	
藤沢市民	107	683	14	6	○
大和市立	86	919	0	0	
聖マリアンナ医大横浜市西部	80	757	17	5	
茅ヶ崎市立	73	729	5	9	
市立川崎	54	252	0	1	
国際親善総合	37	732	2	—	
小田原市立	29	373	2	0	○
東海大大磯	28	309	2	1	
小澤	9	450	0	0	
横浜市立みなと赤十字	6	230	0	0	○
県立こども医療セ	6	9	0	0	○
横浜旭中央総合	3	440	0	0	
済生会横浜市南部	1	708	0	0	
湘南鎌倉総合	0	1521	0	0	
海老名総合	0	1408	0	0	
横浜市立市民	0	729	38	0	
東芝林間	0	459	0	0	
横須賀市立うわまち	0	417	0	0	○
済生会横浜市東部	0	329	0	0	
聖隷横浜	0	267	0	0	
鶴見大歯学部	0	265	0	0	
横須賀市立市民	0	250	0	0	
平塚市民	0	178	0	0	
湘南藤沢徳洲会	0	155	0	0	
平塚共済	0	135	0	0	
県立足柄上	0	135	0	0	
横浜逓信	0	129	0	0	

「セ」はセンター。「国・」は独立行政法人国立病院機構。「地・」は地域医療機能推進機構。「—」は不明または無回答。

表面切開 点眼麻酔で無痛

総合新川橋病院（川崎市川崎区）
薄井紀夫 副院長

白内障は病気というよりは、「年を重ねた証し」の一つだ。白髪になったり、しわが出てきたり。それと同じで、目の中の水晶体の透明性が低下して見えづらくなるのが白内障だ。個人差や程度の差はあるにせよ、年齢を重ねるにつれ誰にも起こりうると言っても過言ではない。

治療方法は、目の表面を約3ミリ切開し、水晶体の中の混濁を吸引してから人工のレンズを入れる。水晶体を肉まんに例えるならば、薄皮に穴を開け、中の生地と具を吸い取ってから中にレンズを入れるような具合だ。治療は10～20分程度で終了する。麻酔薬を点眼などするため、痛みもない。手術後、早期から見えるようになり、一度手術すれば生涯透明性を維持できる。

緑内障は、40歳以上の20人に1人が該当する頻度の高い病気だ。目を満たす水分の出入りがうまくいかず、眼圧が高まり、視神経にダメージを与えることで視野が狭まる。放置すると失明につながるが、点眼薬の有効性が高く、適切な治療をすれば進行を防ぐことができる。怖がらずに、医師に相談してほしい。

白内障と緑内障に共通しているのは、徐々に進行するため、気付きにくいことだ。特に緑内障は、視力は低下せずに視野が狭まってくるので、自覚症状が出にくい。50歳を過ぎたら一度、近くのクリニックや病院で検査を受けてもらいたい。

同院では、12人の医師や16人の視能訓練士らがそれぞれの専門を生かして、網膜硝子体疾患やぶどう膜炎、小児への対応など眼科領域のほぼ全てを網羅した治療を行っている。地元の眼科クリニックなどとも連携した「地域に開かれた病院」でありたいと考えている。

全国の調査結果は「くらし健康面」に掲載しています。次回は5月1日「補聴器」の予定です。